2016年度立教ゼミナール発展編
「ジェンダーの視点で見直す家族と子育て」紹介

2016年度は「立教ゼミナール発展編」を「全カリ」の企画提案型科目として春学期に開講することになりました。掲げたテーマは「ジェンダーの視点で見直す家族と子育て」。学生一人ひとりが深く内面化している性別役割分業意識をとらえ返し、ジェンダー平等の視点でこれからのキャリアを主体的にデザインしていくためには、具体的な経験や行為に即してジェンダー規範をめぐる葛藤や対立をリアルに考えておく作業が必要不可欠です。このゼミでは、担当者が子ども２人を保育園と学童保育にそれぞれ預けて「働く父」であることもあり、保育の問題について照準を合わせ、現代日本社会における子育てと家族をめぐる諸問題を扱います。それは学生にとっても身近な話題であるはずです。立教ゼミナールは多彩なゲスト講師を招聘できるのが特徴で、現時点では、現役の保育士や育児雑誌を編集してきたジャーナリスト、新聞記者、男女共同参画行政を担当している公務員、子育て中のパパ・ママでもある本校の職員などを予定しています。金曜日５限に授業を設定したのは、講師を囲んでの教室外での延長戦を想定してのことです。経験豊かな人生の先輩でもある社会人講師の問題提起を起点に、経験に根ざして暮らしのジェンダーを問うゼミナールになることを期待しています。

和田　悠（ジェンダーフォーラム所員／本学文学部准教授）

立教ジェンダーフォーラムのご案内

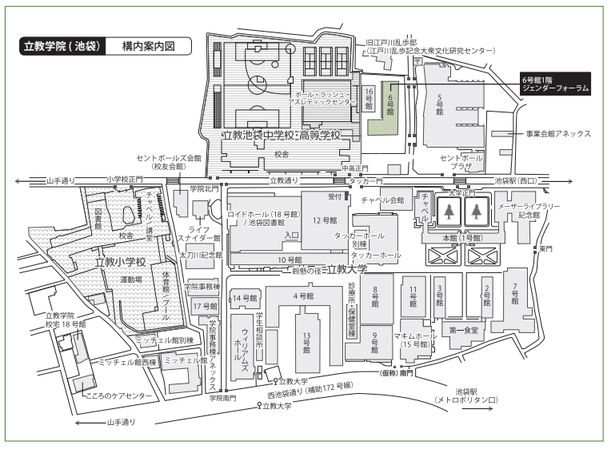
ジェンダー（ｇｅｎｄｅｒ）とは、社会や文化の規範に照らして意味づけられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」などの観念もその一例です。時に「常識」「あたりまえ」とみなされがちですが、性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。「常識」にとらわれず、性や性差についての問題に敏感に反応し、本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダーフォーラムは性別に関わらず、女性も男性もそれぞれの多様性を認め、一人ひとりの個性を輝かせられる社会を目指すため、1998年４月に発足しました。

ジェンダーフォーラムは2013年３月に、ミッチェル館から６号館へ事務室を移転しました。

立教大学ジェンダーフォーラム

開　室　日：毎週月曜日～金曜日
開室時間：10:00～16:00
場　　所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL&FAX：03－3985－2307
E-mail　：gender@rikkyo.ac.jp
URL　　：http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。



Gem

Rikkyo Gender Forum
News Letter

Vol·34
2016.3.31
立教大学ジェンダーフォーラム

Ｇｅｍとは…光輝く宝石。
ジェンダーフォーラムの前身である
女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、
Gender Encountering at Mitchell
（ミッチェル館でのジェンダー
の出会い）を意味します。

映画上映会（2015年10月３日（土））

ドキュメンタリー映画『何を怖れる』上映会＆松井久子監督講演会

登壇者：松井 久子 氏（映画監督）

淡々とした語り口で自分の過去を振り返る。次々と画面が変わり、「怒れる女たち」が言葉を重ねていく。彼女たちの発する言葉は一切装飾がなく自己を凝縮させている。女である為に自己を抑制することへの疑問と社会への怒りが迸る。そんな彼女たちは純粋で美しい。私は圧倒され、畏怖とともに憧憬を覚える。と同時に、自分の苦い過去が脳裡を過る。

母親から「アンタたちがいるから離婚できない」と言われた上野千鶴子さんの言葉に胸が痛くなる。私の両親も不仲であり夫婦喧嘩が絶えることはなく、母からは「アンタたちの為に我慢している」と幼い頃から言われ続けていた。そんな母親を不憫と感じながらも、一方で子どもに負債感を与える母親に対する嫌悪感は日増しに大きくなっていった。しかし、私には親と「闘争」する勇気はなく、大学進学を理由に合法的に「逃走」するしかなかった。両親から長男の義務を執拗に聞かされ続けていた私であったが、大学卒業後も親元へ帰ろうとはしなかった。

ところが、４年前に母が体調を崩した為、30年余勤務した職場を退職し、実家で両親とともに暮らし始めることとなったが、経済的な不安を抱えながらも退職を決断したのは、やはり「長男」としての責務を果たしていない「後ろめたさ」を感じてのことである。

今も昔も、ジェンダー問題に通底するのは「家父長制」であり、長きに亘り長男は「家父長制」を維持する社会的装置という側面を持っていた。男である私にとっても「長男」という呪縛からは逃れ難く、人生の途中で「専業主夫」への転職を余儀なくされたが、21世紀の現在でも「男は山へ柴刈り（稼ぎ手）、女は川へ洗濯（主婦）」という性別役割分業が厳然と残っていることを痛感させられた。上野千鶴子さんはご自分を「マージナルウーマン」と称されているが、「主夫」もまた社会的に認知され難い「マージナルな存在」である。多様な生き方を認めない社会は女性だけでなく、男性にとっても生き難い。

フェミニズムが男女間に横たわる性的差別解消だけでなく人間としての権利と自由の獲得を目指す思想であるならば、男性にとっても大いに歓迎されるべきであろう。松井監督は周囲の目を怖れ、フェミニズムと距離を置いていたと語られた。そんな監督の視点だからこそ、私の様な中年男でもシンパシーを感じられる映画になっている。「男たちよ、何を怖れる？自分の言葉で社会を、そして自分を語れ」と叱咤激励された気がしたのだが…。

守屋　眞二（東京家政大学職員・淑徳大学非常勤講師）

第66回ジェンダーセッション　(2015年10月26日(月))

「グローバル・キャリアへの知的アプローチ ――日本人女性・アメリカ社会・ビジネス界」

登壇者：西村 由賀里 氏（マーケティング・コンサルタント）

第66回ジェンダーセッションには、独立マーケティング・コンサルタントである西村由賀里先生に登壇していただき、「グローバル・キャリアへの知的アプローチ――日本人女性・アメリカ社会・ビジネス界」と題して講演していただいた。アメリカ社会、とりわけビジネス界では日本人は～だよね、といったステレオタイプな日本人像が共有されており、常に「日本人」という人種的な枠組みを通して自身がみられる――レイシャル・プロファイリング――という現実があることを示され、アメリカ人の多くが持つ「日本人」イメージのプラス面マイナス面を冒頭でいくつも列挙していただいた。重要なのは、そうした現実があることをまずはしっかり認識し、その上でどのようにマイナス面と思われる部分を強みに変えていけばよいのかについて、ご自身の経験から具体的なアドバイスを提示してくださった。

また、アメリカにおける歴代の女性CEOにも言及していただいたが、日本以外のアジア諸国出身の女性がアメリカでCEOとしてたしかな存在感を示している状況を鑑みれば、日本国内の企業にCEOはおろか重役にすらまだ女性が少ない状況に、日本の構造的な問題を感じずにはいられなかった。

講演は「日本人」を本質化するような議論ではなく、むしろ「日本人はこういうイメージ」というフレームを通して見てくる社会の中でどのように自分を生かしていけばよいのかを考えさせられる内容だった。振り返って、私たちも「外国人」に対してステレオタイプなフレームを通してみていないだろうか。フレームを通さずに自分と相対するその人自身と向き合える社会こそが本当の意味でグローバルな社会なのだろう。いつかそのような社会が実現することを願いたい。

嶽本　新奈（ジェンダーフォーラム事務局）

2015年度全学共通カリキュラム「『婚活』現象を考える」の授業から

2015年度に全学共通カリキュラム（通称：全カリ）の主題別Bという科目群の１つとして「『婚活』現象を考える」という授業を行った。前年度の「現代社会とジェンダー」に引き続き、ジェンダーフォーラムの提供科目である。前年度では受講生に女性のライフコースや労働に関する知識が浅いことがわかっていたので、今回は「婚活」という多少キャッチーな用語を意識的に使い、若者が結婚しない状況に関連する様々な問題を、ジェンダーの視点から考えてもらうことにした。実質的には「労働とジェンダー」と言ってよい内容である。ゲストスピーカーを何人かお招きしたが、日本在住の外国人に海外と比較した日本の性別役割意識の特徴を話していただいたり、行政に関わる立場の人に女性のライフコースの相談事例を話していただいたりした。またグループディスカッションを数回行って受講生の間でも様々な意見があることを知ってもらう機会とした。授業に対する受講生の感想では、今まで考えたことがなかったことばかりで、今後の人生設計を考えるようになったという意見が多く、このような授業の必要性が痛感させられた。

豊田　由貴夫（ジェンダーフォーラム所長／本学観光学部教授）

第67回ジェンダーセッション　(2015年12月14日(月))

「『檻の中』から見る女性の労働・結婚・階級 ――ヘンリー・ジェイムズと19世紀末イギリス社会」

登壇者：松浦 恵美 氏（立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託）

昨年10月、ヘンリー・ジェイムズが1898年から晩年にかけて居を構えたライを訪れた。ライはイングランド南東部イースト・サセックス州にある、中世の街並みの残る小さな町である。町の中心にある教会から西に向かう石畳の小道の先にジェイムズの住んだラムハウスの玄関が見える。ラムハウスはイギリスらしい庭のきれいなこじんまりした住まいで、ジェイムズが電話室として使っていた玄関ホール脇の部屋からは小道を通る人々の声が自然と耳に入ってくる。ジェイムズも同じように町の人々の会話を聞いていたのであろうかと想像し、高尚な作家と言われるヘンリー・ジェイムズが身近に感じられたことが印象に残っている。

今回のジェンダーセッションにおいて松浦恵美さんが取り上げられた『檻の中』は、ヘンリー・ジェイムズがロンドンからライに居を移した1898年に発表された作品であり、ロンドンの高級住宅街メイフェアにある電報郵便局で働く下層中産階級の女性電報手が主人公である。松浦さんが指摘されたように、ヴィクトリア時代の最先端通信技術の一端を担いながら公衆に身をさらす点において危うさをはらむ女性電報手という仕事は、階級の流動性の犠牲者であるという自覚と相まって主人公を卑下と自負の混在の中に置いている。そして仕事上覗き見る上流階級の贅沢さと堕落は、彼女に彼らに対する憧れと嫌悪を同時に抱かせる。

実は、主人公は格下の労働者階級のマッジ氏との結婚を余儀なくされている。それによって経済的安定は保証されるものの、階級意識の強い彼女には、当然ある種の妥協を踏まえた選択である。それゆえ彼女は、上流階級のレディ・ブラディーンとエヴェラード大尉のロマンスの中に自らの境遇からの逃避場所、あるいは理想のひな形を見出すのである。

このような状況にある下層中産階級のヒロインの心理状態を描きこむジェイムズの想像力には圧倒されるばかりである。ジェイムズは、他にも『ねじの回転』において下層中産階級のガヴァネスの不安、「ブルックスミス」において労働者階級の執事の悲哀を描いており、あらためて彼が華やかな上流階級の人々を描いただけの作家ではないことを認識させられる。ジェイムズは『檻の中』のニューヨーク版序文において、自らを「大都会の研究を志す者」としているが、様々な階級が交差しドラマを生み出す大都会は、のどかなライでの執筆生活においても依然としてその想像力の源泉であったのであろう。

今井　道子（本学交友・文学研究科科目等履修生）

2015年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金授与者決定！

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。2015年度は（A）ジェンダーフォーラム論文賞：2件、（B）活動・研究助成金：0件の応募があり、2015年11月25日に開催された選考委員会において、1件に奨学金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、同年12月9日に開催された授与式にて、豊田由貴夫所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

◆　◆　◆

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金選考結果

（A）ジェンダーフォーラム論文賞

奨学生氏名：内山　ひかる（現代心理学部心理学科４年）

タイトル：セクシュアル・マイノリティサークルが所属する当事者に及ぼす影響
―成人のアタッチメント・スタイルと適応感の視点から―

支給額：５０，０００円

（B）活動・研究助成金

該当者なし